

ニュースレター

No.13

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE KANTO GAKUIN UNIVERSITY



ご挨拶

キリスト教と文化研究所
所長

森島 牧人

2001年10月13日に発足しましたこの「キリスト教と文化研究所」も、早いもので五年目を迎えました。これまで当研究所に寄せられました多くの方々からのご支援ご協力に感謝いたします。さて今年度は、本研究所にとっては第三期の前半部分にあたります。各研究プロジェクトおよび作業委員会等の事業計画の確定をすると同時に、第三期のとりまとめに向かつての準備となります。それぞれが良い成果を得られるよう努力して参りたいと願っております。

今回のニュースレターには、各研究グループが企画した三つの公開型プログラムの報告書を載せています。第一のものは、「国際理解とボランティア」研究プロジェクトが6月に企画した、佐々木和之氏による公開研究会の報告です。これは、「憎悪から和解へ」と題した、アフリカ・ルワンダでの平和プロジェクトの報告です。佐々木和之氏は、NGO「日本国際飢餓対策機構」から派遣されエチオピアでの植林指導を指揮する中、アフリカの飢餓対策にまず必要

なものは民族間の和解であると考え、同機構を退職し、アメリカ、イギリスで平和学を学ばれた方です。今秋からミッション・ボランティアとしてアフリカ・ルワンダに赴き、NGO「リーチ」の職員として民族紛争の解決に向かわれています。第二のものは、「坂田祐」研究グループによる「坂田祐先生の生涯と信仰」と題する公開研究会の報告です。同研究グループでは、これまでも坂田日記を中心とした貴重な第一次資料の解説およびデジタルデータ化を進めてきましたが、その成果を内外に示す良い機会でした。第三のものは、「奉仕教育」研究グループがかねてより交渉を続けてきました伊藤隆二先生をお迎えしての公開講演会「奉仕教育と体験教育活動」の報告書です。地道な実践活動に裏付けられた伊藤先生が語る奉仕教育の理論は、講演を聴く私達に深い感動を与えました。先生のご講演内容は、今年度の研究所「所報」に掲載されます。

また現在本研究所では、こうしたテーマ別の研究活動を進めるとともに、来年1月に発行予定の研究所「所報」第4号での成果の発表、2月に関内メディアセンターで持たれる「公開セミナー」などの計画も順次進められております。最後に、皆さま方にはぜひこれら研究所の諸活動をお覚え頂き、今後ともお支え下さいますよう、宜しくお願い致します。

CONTENTS

あいさつ	1
公開研究会(6月)「国際理解とボランティア」研究プロジェクト 憎悪から和解への報告	2~3

公開研究会(7月)「坂田祐」研究グループ 坂田先生の生涯と信仰の報告	4~5
公開講演会(10月)「奉仕教育」研究グループ 奉仕教育と体験活動についての報告	6~7
客員研究員の広場・お知らせ	8

「憎悪から和解へ」

—ルワンダのキリスト教系NGOの挑戦—

講演者：

ブラッドフォード大学 平和学博士課程在籍
ルワンダ現地「REACH」スタッフ

佐々木 和之氏

1. ルワンダとの出会い

ルワンダはアフリカ大陸のほぼ中央部に位置し、国土が四国のほぼ1.4倍にしかすぎない内陸国です。人口は約850万人で、フツ、ツチ、トゥツという3つの「部族」がそれぞれ、人口の約85%、15%、1%を占めると言われています。また、キリスト教宣教史上「福音化がもっとも成功した国」として知られた国で、今も国民の約9割（カトリック約65%、プロテスタント約25%）がキリスト教徒です。

私は今から約5年前にルワンダと出会いました。私は以前、ある国際協力NGO（非政府組織）の一員として、エチオピアの農村で自立支援活動に取り組んでいました。その任期が終わる前にルワンダを訪れ、その惨状に触れる中で大きな衝撃を受けたのでした。ルワンダでは、1994年の4月から7月にかけて、集団殺戮（ジェノサイド）によって80万人以上が犠牲になりました。前フツ系独裁政権と、ツチ系難民を中核とするルワンダ愛国戦線（現政権）の間で、1990年から内戦が続いていましたが、軍事面で劣勢に立たされると共に、国内外からの民主化要求で追い詰められた政権内部の急進勢力が、民兵組織、国軍、フツ系一般住民を動員・扇動してツチ系住民の殲滅を図ったのでした。性別や年齢を問



わず、ツチであると思なされたものは全て、「反国家武装勢力」ルワンダ愛国戦線の共謀者というレッテルを貼られ虐殺の対象になりました。更に、当時の反体制政党的メンバーや集団殺戮に反対した一部のフツ系住民も殺されました。その後、集団殺戮が終息する一方で、ルワンダ愛国戦線の報復を恐れた200万人以上のフツ系住民が近隣諸国に流出し、その過程でも多くの人々が犠牲になりました。

それから11年が経過し、ルワンダ国内は、戦争が無いという意味においては平和になりました。内戦で破壊された首都キガリは、見違えるほどに復興しています。しかし、フツ系住民とツチ系住民の間には今も憎悪と相互不信が渦巻き、それを解きほぐしていくことなしには、将来紛争が再燃してもおかしくない状況です。

2. 現地NGO REACHの取り組み

これまで私は、イギリスのブラッドフォード大学で、ルワンダの紛争と平和構築について研究してきましたが、9月末からは現地にじっとりと腰を据え、Reconciliation Evangelism And Christian Healing (REACH)という現地のキリスト教系NGOの一員として働いていくことになりました。REACHの主な活動を紹介します。

1) 平和と和解のセミナー

様々な傷を抱えた参加者一人ひとりの心の中にあるものを語り合うこと、そしてそれを聞き合うことから始め、徐々に平和と和解についての学びを進めていきます。最終的には、様々な争いごとを非暴力で解決していくため、その調停役を努めていくピースワーカーの養成を目指しています。

2) 被害者の癒しと生活再建の支援

トラウマに苦しむ人々へのカウンセリングと、彼・彼女達の生活再建のための支援をしてきました。例えばある地域では、集団殺戮の生存者であるツチの女性達と、虐殺に加担した容疑で拘留されている夫を持つフツの女性達が、共同で石鹸を作ったり家畜を飼育するなどの活動を続けています。

3) 若者を対象とした平和教育

・交流プログラム

1994年には、多くのフツの若者達が政府の扇動に乗って集団殺戮に参加しました。その様なことが繰り返されることを防ぐために、音楽、舞踊、劇、スポーツなどの交流を通して、若者達の間で深い人間的な関係を構築してゆこうという試みです。また、無職の若者達の経済的自立を助けるための、協働プロジェクトにも着手しています。

3. 今後の展開

今後は、これらの活動を拡充していくと共に、集団殺戮に加担した罪で有罪判決を受けた受刑者達が参加する「償いのプロジェクト」を立ち上げていきたいと考えています。今ルワンダでは、ガチャチャと呼ばれる民衆法廷による草の根裁判が全国各地で始まっています。(集団殺戮の首謀者達の裁判は通常の裁判制度で行われます。) ルワンダ政府は、このガチャチャ裁判を「和解のための正義」のプロセスと位置付け、罪を認めて謝罪した殺戮加担者の刑罰を大幅に軽減することを決定しました。これまで約10万

人のフツ系住民が拘留されてきましたが、その大半が既に自白しており、ガチャチャ法廷で判決が下りさえすれば、何らかの地域奉仕をしながら残りの刑期を務めることになっています(既に約5万人が仮釈放処分中)。そこで、地元のNGOや教会等と協力して、集団殺戮の生存者や地元のコミュニティーのニーズ、そして受刑者達の意志を尊重したプロジェクトを立ち上げ、地域奉仕の受け皿にしていくことを検討しています。そのことによって、被害者の回復と生活再建にとって有意義であるとともに、受刑者の更生という観点からも意味のある償いと和解へのプロセスになり得るのではないかと考えています。

4. 息の長い活動を目指して

私は、現地の人たちの自発的な活動を支援してゆくというスタンスを大切にしながら、この働きを進めていきたいと思っています。そのためには、たとえ小さなことでも彼・彼女達のペースに合わせ、息の長い活動をしていくことが大切です。そして、日本の皆さんにルワンダの平和と和解への試みについてお伝えし、現地の人々との連帯の輪を広げていきたいと願っています。あれだけのことが起きた国で、和解へ向けて歩みだしている人々がいるのです。彼・彼女らが灯している希望の光を決して消してはならないと思います。どうか皆様もルワンダの人々を支援する輪に、祈りと経済的な支援をもって加わって下さいますように、よろしくお願い致します。



「坂田先生の生涯と信仰

大湯誕生から基督教教育の召命まで」の報告



坂田先生は、会津藩士中村富造（旧姓は平野であった）、ミエ夫妻の次男として1878（明治11）年2月12日に生まれた。母ミエは会津白虎隊中隊長日向内記の長女であった。会津藩は周知のように、明治新政府からは賊軍とされ、青森南部の斗南に移封され、それまでの23万石から3万石に減封された。斗南は不毛の地であり、藩士たちの生活は厳しいものであった。中村家は青森県五戸から秋田鹿角郡大湯に引越し、かくら山のふもとの農家に2－3年住み、その後、大湯城に近いところ、県道66号線に面した

坂田研究グループでは、夏休み直前の7月28日（木）午後4時から、岸政邦氏（日本バプテスト同盟豊中キリスト教会牧師）を招いて、坂田祐先生についての公開研究会を開催した。岸氏は日本バプテスト神学校の卒業論文で坂田先生を取り上げ、坂田先生の出生地の大湯にも出かけて資料を集め、写真にも記録してきたとのことで、今回はとくに、坂田先生の出生から基督教の召命に至るまでを取り上げていただいた。

下記は研究発表の概要である（文責 帆苅）。



地に居住した。

坂田先生もこの大湯で誕生した。その後、1884（明治17）年4月に、大湯尋常小学校に入学し、1888（明治21）年に抜群の成績で卒業した。

1891（明治24）年、中村家は大湯川の上流にあった不老倉鉾山に移り住む。この年の秋、坂田先生は現在の十和田町にある毛馬内高等小学校に入学するも、翌年夏、家計困難のため学業



を続けることができず、退学を余儀なくされ、家計を助けるために不老倉鉱山で働く。

坂田先生は、ここで1896（明治29）年まで働かれたが、勉学の志やみがたく、同年6月12日早朝、懷中にわずかな金を持って出奔し、東京に向かう。旅費を稼ぐために途中の鉱山などで働きながら東京に向かった。月山のふもとにある永松鉱山では、所持していた和英辞典と新約聖書を交換した。また、会津坂下町では古本屋でパーレーの『万国史』の英文の原書を購入している。途中からは列車で東京に向かい、東京、横浜、浦賀などで働いたが、思うようにならず、栃木県の足尾銅山に行き、そこで1898（明治31）年まで働く。ここで、後に夫人となる坂田チエの父、坂田桃吉と出会う。

同年の8月に、陸軍教導団の入学試験を受けて合格し、騎兵科の生徒となる。翌1899年11月4日に、教導団騎兵科を卒業し、陸軍騎兵軍曹に任ぜられ、11月10日、近衛騎兵隊付を命ぜられ赴任する。この近衛騎兵隊に勤務していた当時、1902（明治35）年4月20日、坂田先生が近衛隊の兵舎から神田美土代町の東京基督教青年会館の前まで歩いて来ると、キリスト教の説教があるから中に入りなさいと声をかけられ、促されるようにして中に入った。この日は、アメリカから帰国して間もない木村清松先生が熱弁をふるった。坂田先生はこれに強い印象を受けて聖書を学び始める。



この年の12月、坂田先生は牛込の陸軍士官学校の馬術教官として転任する。この陸軍士官学校の裏門の近くに東京学院があった。坂田先生は、東京学院の宣教師館に出入りし、ヘンリー・タッピング師のバイブル・クラスに出席するようになる。こうして、翌1903（明治36）年5月3日に四谷浸礼教会でバプテスマを受ける。

その後、日露戦争に従軍、帰国してから、正式な教育を受けたいとの志捨てがたく、依願免官をして、東京学院に学び、さらに一高、東京帝国大学へと進学し、1915（大正4）年に37歳で東京帝国大学を卒業する。

東京帝大卒業後、母校、東京学院の教師となり、1919年（大正8）年には、横浜に中学関東学院を設立し、学院長となる。



奉仕教育と体験活動について

—福祉教育・ボランティア学習の理念と実践—

講演者：横浜市立大学名誉教授
伊藤 隆二 先生



公開講演会は10月19日（水）午後5時50分から7時20分に行われた。出席者数は約120名であった。公演内容の全文はいずれキリスト教と文化研究所所報に掲載される予定であるので、ここでは、講演をお聞きして学生たちがどんなことを感じたか、その感の一部を紹介したい。なお学生名は省略させていただいた。（文責 経済学部教授 高野進）

「伊藤隆二先生の講演会で印象に残った話は、61年前、伊藤先生が幼いころ、母親と夕食を食べたときの事だった。戦後間もない頃で、とてもまずしく、ご飯、漬物、味噌汁、小さいいわし一匹だった。先生が何気なくそのいわしを食べようとしたとき、母親が独り言のように、こうつぶやいた。

『おまえのそのいわしは漁師にとらわれなければ、今でも家族と一緒に太平洋の真ん中を楽しく泳いでいただろうになあ。そしてそのいわしは、大きくなっておなかに卵を宿し、何百何千ものいわしを産んだらうになあ』何気なく食べようとしていたその小さいいわし。いわしには命があった。

普段何気なく食事食べていると、見えない事実。私も命あるもの。命あるものはその

他の命を犠牲にしなければ生きていくことができない。……日本には『いただきます』という言葉がある。これは、命あるものを頂戴するというありがたいことであり、それに感謝の気持ちを捧げるということである。この話を聞いて僕ははっとした。いつも当たり前のように肉や魚や野菜を食べていたからである。『いただきます』はそんな深い意味があったなんて、目からうろこだった。僕は管理栄養士になるため大学に通っている。食のプロになる僕たちは、栄養や嗜好面だけでなく、感謝の心も身につけて、そのところを栄養教諭となり、子供たちに食物に対するありがたみ、命に対するありがたみ、感謝の心を一人でも多くの子供たちに伝えて行きたいと思う。」



「私が伊藤隆二先生のお話の中で一番印象に残っていることは、ガリレオ・ガリレイの『宗教なき知育は知恵ある悪魔をつくることなり』という言葉についてです。この言葉と、伊藤隆二先生の『私たちが今まで“目に見えるもの”つまり偏差値、社会的地位、経済力などを信じてきたことが、現在になっていじめや暴力、強盗、殺人などの社会的問題が多発している現状を作り出している。それを改善するためには『“目に見えないもの (something-great)” の価値を知る必要がある』というお話とを関連させて考えると、“目に見えるもの”しか信じないでいると、自分にとって大切なものを見失い墮落した世界を生み出すことになるだろう、という私たちに対する警告のようなものを感じました。」

「今回の講演会に参加して一番印象に残っていることは、『誰もが嫌がるごみ掃除や便所掃除をやることで、品性、尊厳性が輝く』という言葉でした。このような仕事は誰もが嫌がることだと思います。ですが、考え方をかえて『心をこめて自発的に尽くす』という考えをもつことによって、嫌な仕事もみんなのためになり、このことが、ボランティアに繋がっていくということです。……私も今まではごみの掃除やトイレ掃除はとても嫌でした。だがこれからは自分から積極的にやっていきたいです。」

多くの聴衆が深く感銘を受け、ボランティア、奉仕の実践と理解へと新たな前進をとげたようだ。

(経済学部教授 高野進)

客員研究員の

広場

新しい客員研究員として

三井 純人

この度、「キリスト教と日本の精神風土」研究グループの客員研究員となりました三井純人と申します。

私は勝利教会大宮チャペル（単立）に通うかたわら数年前から「キリスト者の生き方・成長の12ステップ」というクリスチャンとしてお互いの霊性を高め合うための自助グループに参加していたことから安田先生と懇意にさせて頂けるようになりました。かつて早稲田大学の文学部東洋哲学科を卒業したこともあり、キリスト教と仏教の関係性というテーマは以前よ

り興味があったところですが、早速9月に発表の機会を与えて下さり感謝しております。

現在はアライアント国際大学／カリフォルニア臨床心理大学院に在学しカウンセリングの勉強をしております。日本もストレス社会ということでメンタルケアの必要性は今後ますます強まるものと考えられますが、欧米で発達したカウンセリング理論はやはりキリスト教の影響をかなり受けているものですので、この分野からの研究もこれから取り組んでゆきたいと考えています。

皆様はそれぞれの専門分野のスペシャリストということでこれから多くのことを教えて頂けることを楽しみにしております。どうぞ宜しくお願い致します。

文化人類学、共同体研究の視点から
山本 直美

この度、「国際理解とボランティア」「キリスト教と日本の精神風土」という2つの研究グループに加えていただきました。私自身、カトリックの家庭に育ちながらもキリスト教系学校に在籍した経験はないことから、キリスト者の視点を生かしつつ、また相対化しつつ進める研究過程に、大変貴重な場と感じ入っております。

私は現在、文化人類学・行動科学の分野で非常勤講師を行う立場から、また日本の「高度経済成長」期以降模索されてきた対抗文化的な共同体の民族誌的研究を行う立場から、両研究グループにおいて大変興味深く学ばせていただい

ております。「国際理解」のグループでは、タイ山岳地帯の村にて、人びとの生活環境を改善しつつ奉仕・共生の精神を涵養する営みを重ねてこられたとのこと、数年来の活動に敬服いたします。今後は、人びとの生活様式、社会関係、価値観の変化に伴って村の共同体的な性格もまたいかに変化するのか、文化人類学の視点から議論に参加させていただければと思います。「精神風土」のグループでは、今改めて「靖国問題」の再検討を開始すること、問題の複雑さにたじろぎつつも、その方針に強く共感いたします。「靖国」は、個人化・孤立化をいっそう強める現代社会において、人びとの共同性を喚起する面があり、しかし同時に人びとを排除し分断し続ける面も確かにもつと考えます。現代社会を問い直す視点から、議論の輪に加えていただければ幸いです。

お知らせ

本研究所のHPに動画(ビデオ)を掲載いたしました。

画面上のニュースレターの箇所にビデオクリップ研究会、講演会(抜粋版)。ビデオクリップ・キリスト教と文化研究所開所式2001年10月をHPで見ることが出来ます。これから公開セミナーなども掲載していく予定です。(HP委員会)

http://kgujesus.kanto-gakuin.ac.jp/main/whats_main.htm

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号

TEL: 045-786-7873 (研究所直通)

発行者: 森島 牧人

Director: Makito Morishima